

のうみじょう
能見城跡

調査の経過 能見城跡は、東加茂郡旭町大字榊野に所在し、矢作川の支流である阿摺川の上流左岸にある丘陵部先端に築かれた戦国時代の中世城館跡である。発掘調査は、愛知県土木部による県道土岐足助線改良に伴い、平成10年5月より9月にかけて行った。調査面積は2,400㎡である。

調査の概要 今回の調査により、能見城跡は次の3時期の変遷があったことが確認された。

(1) 能見城の時代 (15世紀後半～16世紀初頭)

本丸跡にある物見櫓痕跡と2つの曲輪跡、南側から本丸への上り口と見られる階段跡を検出した。それに伴って、城の営まれた際使われた土師器小皿・皿、瀬戸美濃産天目茶椀・鉢・壺、常滑産甕が出土し、宋銭の「元祐通寶」、青磁椀も見られた。物見櫓跡の大部分は、江戸時代における開墾により削平されたものと思われる。

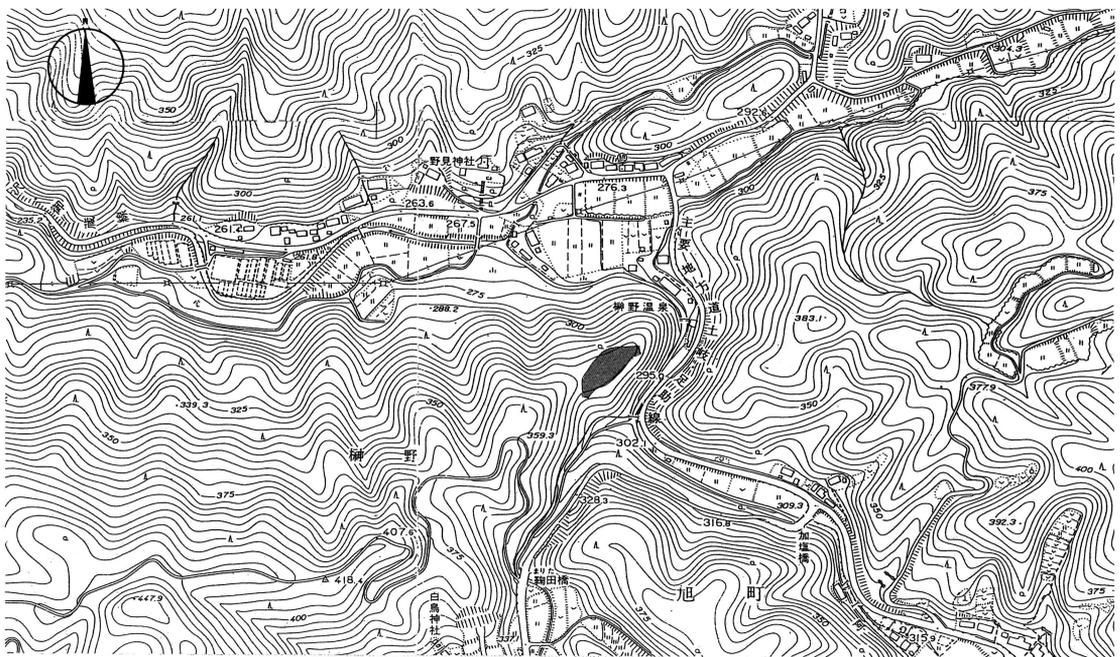
(2) 墓地の時代 (16世紀～江戸時代)

南西曲輪の南側斜面から、3基の土抗墓を検出した。S Z 01からは人骨が1体出土した。

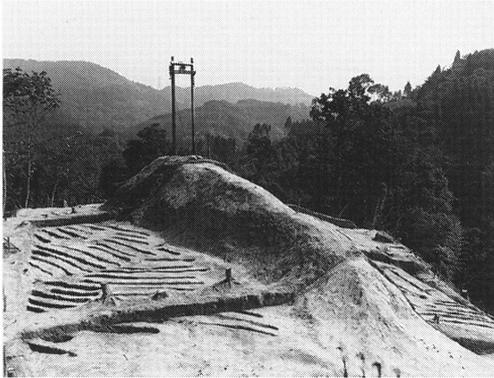
(3) 畑地の時代 (江戸時代・昭和前半)

江戸時代の畑の畝痕と思われる溝を検出した。溝からは、江戸時代の銅銭「寛永通寶」、瀬戸美濃産陶器も少量出土した。昭和前半の畑は現地形で残存しており、物見櫓跡の西側が桑畑、東側がサツマイモ畑であった。本城跡のような小規模な城跡で、生活に伴う多数の遺物が出土するのは明らかな活動の痕と当時における能見城の営みの特徴づけるものであり、この地域の戦国時代を考える上で貴重な資料になった。

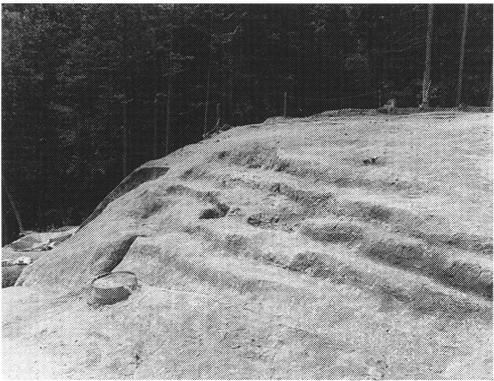
(木下 一・花井 伸・蔭山誠一)



第1図 調査区位置図 (1 : 10,000)



物見櫓痕跡と江戸時代の畑の畝痕跡



本丸への上り口の階段の跡



土坑墓 (SZ01) から出土した人骨



第2図 遺構図 (1:400)